

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第542号 平成25年5月14日

## 季節の言葉

日本気象協会は4月25日、現代日本の季節感を表した「季節のことは36選」を発表しました。一般公募で寄せられた約1600の言葉の中から選んだのだそうで、今後、テレビの天気予報など色々なところに登場しそうです。

私たちは、手紙を出す時に「暑中お見舞い申し上げます。」とか「初秋の候」といった時候の挨拶を挿入しますが、この時候の挨拶と実際の季節が合っていないなあと感じた事があると思います。例えば、寒さに震えている2月なのに「立春」といい、熱い盛りの8月に「立秋」というのは、生活実感に全く合っていませんね。ですから、「暦の上では立春ですが、まだまだ寒い日が続きます」といった表現が登場する事になります。

こうしたことから、日本気象協会では、2011年2月から現代の季節感にあう新しい「季節のことは」を提案するための取り組みを行っていたものです。同協会が昨年8月から12月にかけて「あなたが感じる季節のことは」と題して広く季節のことはを募集したところ、全国から1600件近い「季節の言葉」が寄せられたそうで、今回はその中から37の「季節の言葉」が選ばれたものです。

ところで、普段使われている「季節の言葉」と実際の季節感との間にどうしてずれが生じてしまうのでしょうか。それは、現在私たちが使用している暦（新暦）と、今日では実用としては使用されていませんが、日常生活の中に浸透している古い暦（旧暦）との違いに原因があります。

今、私達が日常生活に使用している暦（新暦）は太陽暦ともいい、旧暦の明治5年12月3日に導入されたものなのです。因みに、この日は、新暦では明治6年1月1日となり、以降私達は、この新暦を使用

## 季節のことは36選

1月	初詣、寒褌古、雪おろし
2月	節分、バレンタインデー、春一番
3月	おひな祭り、なごり雪、おぼろ月
4月	入学式、花吹雪、春眠
5月	風薫る、鯉のぼり、卯の花
6月	あじさい、梅雨、蜚舞う
7月	蝉しぐれ、ひまわり、入道雲、夏休み
8月	原爆忌(広島、長崎)、流れ星、朝顔
9月	いわし雲、虫の声、お月見
10月	紅葉前線、秋祭り、冬支度
11月	木枯らし1号、七五三、時雨
12月	冬將軍、クリスマス、除夜の鐘

注：7月のことは4つのため、全部で37個

して生活しています。

新暦に切り替わるまでの間使用されていた旧暦は中国で発明されたもので、太陰暦ともいわれているように月の満ち欠けに基づいて作られた暦です。また、この太陰暦では実際の季節との間にずれが生じる為に、本来の季節を知る目安として、太陽の運行を元にした二十四節季が暦に導入されています。

この暦が中国から日本に伝来したのは約7世紀頃といわれていますが、それ以降何度も改良が重ねられ、旧暦は人々の生活に深く根付いて来ました。

そうはいても、例えば、四季の変化について見ると、春は3月から5月頃、夏は6月から8月頃というのが実感だろうと思いますが、暦の上では、春は2月4日の「立春」以降、夏は5月7日の「立夏」以降という事ですから、旧暦と現代人の季節感には感覚的には1ヶ月程のずれがあるといえるでしょう。

日本は四季の変化に富んでおり、それはまた、俳句の季語を見ても分かる様に日本人の感性を豊かなものして来ました。しかしその一方では、近年、日本文化としての季節感や情緒などが薄れて来ているともいわれています。その背景には、生活環境の大きな変化あると思いますが、同時に、二十四節季等の「季節の言葉」と実際の季節感とが乖離しているという事も少なからず影響しているように思えます。

中国から伝来した二十四節季は、元々中国の気候を元に名づけられたものですから、日本の気候や季節と合わないところが生じるのは当然ですが、これに対して先人は知恵を働かせ、「土用」「八十八夜」「入梅」「二百十日」など「雑節」と呼ばれる季節の区分けを旧暦に取り入れて補足して来ました。

今回、生活感覚や季節感を大事にした新たな「季節の言葉」が設けられましたが、これを機会に、四季折々の変化がもっと身近なものになり、日々の暮らしがもっと色取りの豊かなものとなる様に期待したいと思っています。(塾頭：吉田 洋一)